



## 冠状動脈バイパス術(CABG)を受ける患者に必要な情報および情報提供のための看護介入に対する経験年数による看護師の認識の差異に関する研究

メタデータ	言語: jpn  出版者:  公開日: 2015-03-30  キーワード (Ja):  キーワード (En):  作成者: 井上, 奈々, 松本, 智晴, 石田, 宜子, 高見沢, 恵美子, 玉井, 照美, 道端, 由美子, 竹下, エミ子, 大名, 美記子, 杉野, 由起子, 稲垣, 美紀, 石澤, 美保子  メールアドレス:  所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005509">https://doi.org/10.24729/00005509</a>

## 研究報告

# 冠状動脈バイパス術（CABG）を受ける患者に必要な情報および情報提供のための看護介入に対する経験年数による看護師の認識の差異に関する研究

## Medical Information and Nursing Intervention in the information provision for Patients undergoing Coronary Artery Bypass Graft (CABG): A Study of perception of Cardiovascular Nurses with different years of experience.

井上 奈々<sup>1)</sup>・松本 智晴<sup>1)</sup>・石田 宜子<sup>1)</sup>・高見沢 恵美子<sup>1)</sup>・玉井 照美<sup>2)</sup>  
道端 由美子<sup>3)</sup>・竹下 エミ子<sup>4)</sup>・大名 美記子<sup>5)</sup>・杉野 由起子<sup>3)</sup>・稻垣 美紀<sup>6)</sup>  
石澤 美保子<sup>7)</sup>

Nana INOUE<sup>1)</sup>, Chiharu MATSUMOTO<sup>1)</sup>, Yoshiko ISHIDA<sup>1)</sup>, Emiko TAKAMIZAWA<sup>1)</sup>, Terumi TAMAI<sup>2)</sup>,  
Yumiko MICHIHATA<sup>3)</sup>, Emiko TAKESHITA<sup>4)</sup>, Mikiko ŌMYO<sup>5)</sup>, Yukiko SUGINO<sup>3)</sup>, Miki INAGAKI<sup>6)</sup>, Mihoko ISHIZAWA<sup>7)</sup>

キーワード：冠状動脈バイパス術（CABG）、情報提供、看護介入

Keywords: Coronary Artery Bypass Graft (CABG), Providing Information, Nursing Intervention

### Abstract

Purpose: The purpose of this study was to clarify information to provide for patients who had undergone coronary artery bypass grafting surgery, and period and nursing intervention for providing information that nurses with different years of experience attach importance to.

Method: The questionnaire was distributed to 150 nurses who engaged in caring for patients before and after CABG surgery. Three groups consisted of the nurses with under three years, three to ten years, and more than ten years of experience, and the correlation statistics were used to analyze the data.

Result: The significantly fewer nurses with under three years of experience reported that the information about angina or myocardial infarction, the necessity of examination and the examination or treatment progress in hospitalization was important. There were no statistically significant differences among three groups in the period and nursing intervention for providing information. Brochure was the most effective tool to provide the information. The nurses with more than three years of experience were more likely to answer that it was effective to ask for the cooperation of health care professionals and patient's family, and to apply models or images in providing information. This study represents that it is important to provide appropriate information in time. The learning opportunity is also necessary for nurses with less experience to make use of the health care professionals, family members, and tools as models and images.

受付日：2014年9月26日 受理日：2014年12月12日

1) 大阪府立大学

2) 小倉記念病院

3) 済生会熊本病院

4) 熊本中央病院

5) 奈良県立医科大学附属病院

6) 梅花女子大学

7) 奈良県立医科大学

## 要　旨

本研究では、冠状動脈バイパス術（CABG）を受ける患者に携わる看護師150名を対象として質問紙調査を行い（回答者97名：回収率64.6%）、CABG患者に提供する必要がある情報および情報提供の時期と看護介入について看護師経験年数による認識の差異を明らかにした。疾患、検査の必要性および入院治療経過に関する情報提供が必要と回答した看護師は、経験年数3年未満で有意に少なかった。なお、情報提供の時期および看護介入において経験年数による有意差は認められなかった。全般的にパンフレットによる情報提供が効果的であると回答していたが、経験年数3年以上の看護師は、模型や画像の活用および他職種や家族に協力を依頼し情報提供を行うことが効果的と認識していた。したがって、経験年数の少ない看護師が効果的に情報提供を行うには、提供する必要がある情報の統一化に加え、他職種、家族、模型や映像などの資源を活用した情報提供が行えるような教育的介入が必要であると示唆された。

### I. はじめに

再狭窄など二次予防に必要な薬物療法および一般療法である食事、運動などの生活習慣の改善に関する情報提供は、虚血性心疾患により手術を受けた患者にとって重要である。医療情報に関しては、冠状動脈バイパス術（Coronary Artery Bypass Grafting: 以後、CABGとする）患者への入院前後の教育（Lepzyk, 1990, Riceら, 1992, 加茂ら, 2008）や、手術前後の教育（Grady, 1988）など患者教育の時期と患者の知識の獲得に重点を置いた教育効果について幅広く研究が行われている。手術前の患者に対する情報提供は、不安の軽減や術後の回復促進、合併症予防、再入院の減少、在院日数の短縮、患者満足度の向上につながり（Hathawayら, 1986）、CABGの手術前に教育を受けた患者は、手術に対して前向きに捉え、手術前訓練の習得度も高い（Rice, 1992）とされている。そこで、手術前に情報を提供する際は、CABG患者が術後回復に対する認識を抱けるよう、術後の経過や症状の変化、日常生活への回復見通しなど、患者の視点に立った情報の提供が必要である（町本ら, 2011）。しかし、術後の回復の実際が術前の期待に対し否定的であると、手術結果の否定や思い通りにならない状況から術後の健康状態の低下をきたすことが指摘されている（町本ら, 2011）ことから、適切な情報を適切な時期に提供することが重要である。JicklingとGraydon（1997）は、男女へ面接調査を行い、治療、合併症、活動、薬、Quality of Lifeの強化が最も高い情報のニード領域であることを明らかにしている。同様にCABG患者の情報のニードに関する調査（Fredericks, 2007）において、合併症とその予防方法、浮腫予防とその管理、活動、そして胸痛時の対処が患者の最も知りたい情報であることが明らかにされている。一方では、患者の

情報ニードと看護師が提供する情報には差異があり（Simkow, 1995），患者は看護師以外の職種から知りたい情報があるにもかかわらず、看護師自身がそれらの情報を得る機会を提供するという役割について認識していないことが示唆されている（石田ら, 2013）。先行研究において経験年数の少ない看護師は、性指導を行っていない傾向がある（太田ら, 2004）ことや、退院を見越した指導や個別性や主体に対応した指導が少ない傾向にあることも指摘されている（川嶋ら, 2014, 中村ら, 2005）ことから、患者のニードに合った情報提供や情報提供のための介入方法が看護師の経験年数により異なることが考えられる。そこで、CABGを受ける患者に提供する必要がある情報および情報提供のための時期と看護介入について看護師の経験年数による認識の差異を明らかにし、経験年数の少ない看護師が効果的にCABGを受ける患者のニードに合った情報提供を行うための支援を検討することが必要であると考える。

調査にあたって、先行研究（石田ら, 2013）にて明らかとなったCABGを受ける患者が必要とする情報および情報提供のための看護介入の内容をもとに質問紙を作成した。本研究ではこの質問紙を用いて、看護師を対象としCABGを受ける患者に提供する必要がある情報および情報提供のための時期と看護介入について看護師の経験年数による認識の差異を明らかにする。

### II. 目的

本研究の目的は、CABGを受ける患者に提供する必要がある情報および情報提供のための時期と看護介入について看護師の経験年数による認識の差異を明らかにし、経験年数の少ない看護師がCABG患者へ効果的に情報提供を行うための支援を検討する。

### III. 用語の定義

1) 情報とは、医療者から伝えられる医療に関する内容をさす。

### IV. 研究方法

#### 1) 研究デザイン

本研究は、相関関係的研究デザインによる関連検証研究である。

#### 2) 対象

国内の循環器科を有する4病院において、狭心症および急性心筋梗塞でCABGを受ける患者の看護に携わる看護師150名

#### 3) 調査期間

平成25年6月～平成25年8月

#### 4) 調査方法

便宜的に抽出した循環器科を有する病院の看護部長へ研究目的と方法について口頭と文書で依頼し、了承を得た。対象者への質問紙および研究の意義・目的、調査方法、倫理的配慮について記載した文書の配布は、対象者が勤務する病棟師長を通じて行った。質問紙の回収は対象者が投函する方法とし、質問紙の回答をもって研究参加への同意を得たものとした。

#### 5) 調査内容

(1) 提供の必要がある情報：Fredericks (2007), JicklingとGraydon (1997) の先行研究および著者らが患者を対象に行ったインタビュー調査をもとに独自に作成し、以下の大項目12項目(表1)とそれぞれの下位項目72項目から構成されるものとした。それぞれの下位項目について提供の必要があると考える情報をすべて選択するよう提示した。

表1 提供する必要がある情報の大項目と下位項目

大項目	下位項目
1. 狹心症または心筋梗塞について	8項目
2. 胸痛発作について	5項目
3. ニトログリセリンの使用について	3項目
4. 狹心症または心筋梗塞に関連する疾患について	4項目
5. 狹心症または心筋梗塞の治療および検査について	5項目
6. 内服薬について	6項目
7. 退院指導について	16項目
8. 生活習慣について	8項目
9. 食事について	7項目
10. 運動について	3項目
11. 不安とストレスについて	3項目
12. その他	4項目

(2)情報提供の時期：それぞれ大項目に関する情報提供にあたり、「入院前」、「術前」、「術後から安静が必要な時期」、「安静度の拡大期から退院前」、「退院後」の5つの時期から適切と考える時期を選択するよう提示した。

(3)情報提供のための看護介入：それぞれ大項目に関する情報提供にあたり、『口頭で説明する』、『図を描く』、『模型を使う』、『映像を使う』、『パンフレットを用いる』、『クリニカルパスを用いる』、『専門とする他職種に依頼する』、『家族に協力を得る』の8つから効果的と考える情報提供の方法をすべて選択するよう提示した。

(4)対象者の属性：年齢、性別、経験年数、勤務部署(ICU, CCU, 循環器病棟)、勤務部署での勤務年数とした。

#### 6) 分析方法

(1)ベナーの看護理論、梶谷ら (2012) および小山田 (2009) の文献を参考にし、対象を看護師経験年数3年未満、経験年数3年以上10年未満、経験年数10年以上の3群に分けた。

(2)情報提供の必要な有無について項目ごとにクロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 検定ならびに残差分析を行った。また、情報提供の適切な時期か否かについて項目ごとにクロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 検定ならびに残差分析を行った。効果的な看護介入の方法か否かについて項目ごとにクロス集計表を作成し、 $\chi^2$ 検定ならびに残差分析を行った。なお、分析にはSPSS (ver.20) を用いた。

#### 7) 倫理的配慮

便宜的に抽出した循環器科を有する病院の看護部長へ研究目的と方法について口頭と文書で依頼し、了承を得た。対象者への質問紙および研究の意義・目的、調査方法、自由意思による協力、途中辞退の自由、個人情報保護、結果の公表予定、研究参加の同意の確認は回答済みの質問紙の返信をもって行うことなどについて記載した文書の配布は、対象者が勤務する病棟師長を通じて行った。質問紙の回収は対象者が投函する方法とし、質問紙の回答をもって研究参加への同意を得たものとした。また、回収した質問紙は、鍵のかかる保管庫で厳重に管理し、閲覧は研究者のみに限定した。なお、本研究は、大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

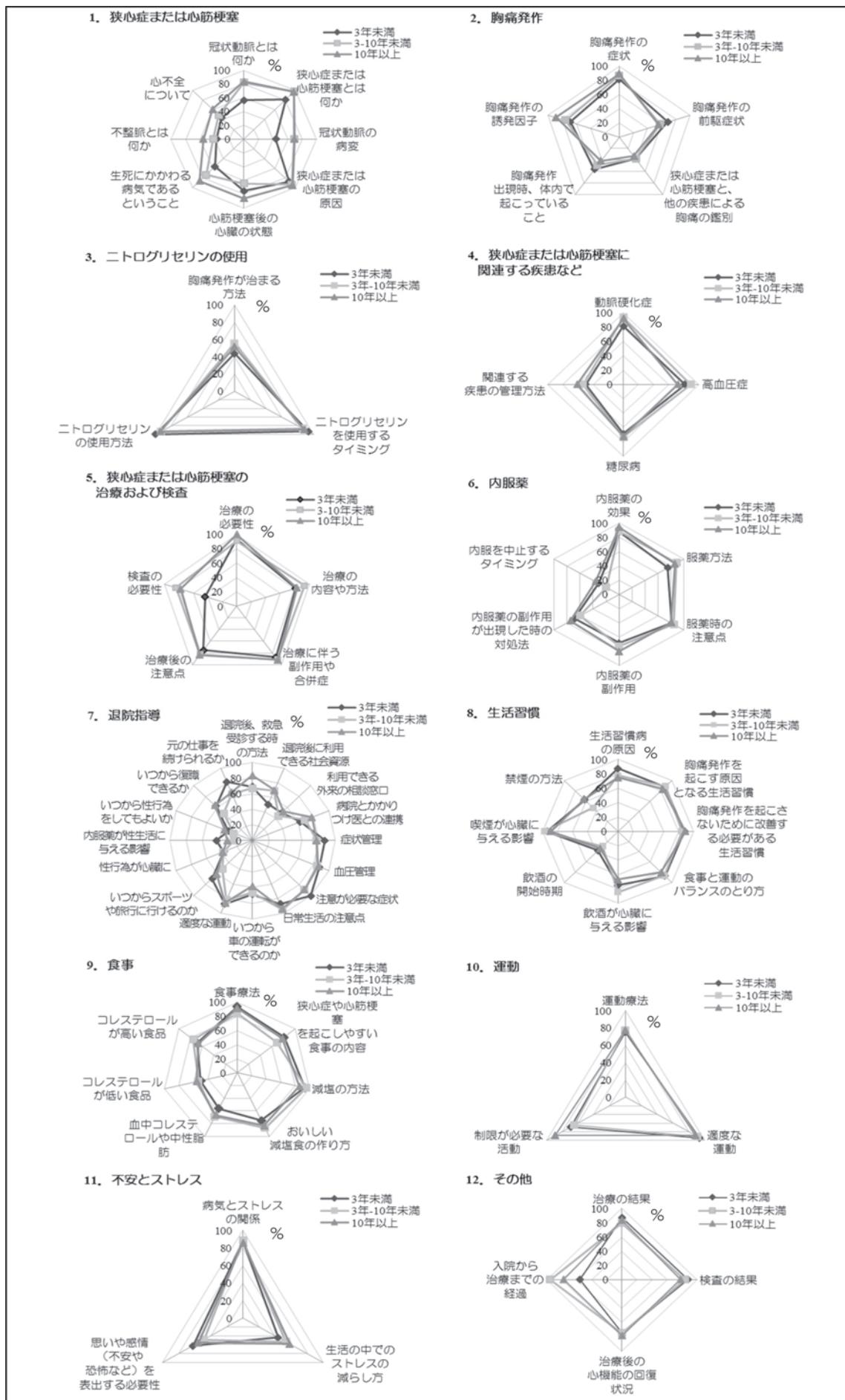


図1 提供する必要がある情報について看護師経験年数群間の比較

## V. 結果

### 1) 対象の概要

循環器科を有する研究協力に同意が得られた4病院に勤務する看護師150名に質問紙を配布し、97名（回収率64.6%）から回答を得た。対象者の年齢は21歳から54歳で、平均年齢は31.1歳（SD7.0）、男性は6名（6.2%）、女性は91名（93.8%）であった。看護師の平均経験年数は、8.8年（SD7.1）、部署勤務年数は、4.3年（SD3.6）であった。経験年数3年未満が16名（16.5%）、経験年数3年以上10年未満が45名（46.4%）、経験年数10年以上が36名（37.1%）であった。勤務部署は、ICU12名（12.4%）、CCU4名（4.1%）、ICUとCCU兼務14名（14.4%）、循環器病棟66名（68.0%）、無回答1名（1.0%）であった。

### 2) 提供する必要がある情報について看護師経験年数群間の比較（図1）

提供の必要があると思われる情報のうち、3群間に有意差が認められたものを以下に示す。

『狭心症または心筋梗塞』に関する情報のうち、3群間で統計的有意差が認められたのは、表2に示す「狭心症または心筋梗塞とは何か」についての情報であり、経験年数3年未満の看護師に少なかった（ $X^2(df=2, N=97)=7.257$  Cramer's  $V=.274$   $p<0.05$ ）（表2）。

表2 「狭心症または心筋梗塞とは何か」と看護師経験との関連

		狭心症または心筋梗塞とは何か		合計
	必要でない	必要である		
経験年数 3年未満	度数	3	13	16
	調整済み残差	2.7*	-2.7*	
経験年数 3年以上 10年未満	度数	1	44	45
	調整済み残差	-1.2	1.2	
経験年数 10年以上	度数	1	35	36
	調整済み残差	-.8	.8	
合計	度数	5	92	97

\* $p<0.05$

『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』に関する情報のうち、表3に示す「検査の必要性」については3群間で統計的有意差が認められ、経験年数3年未満の看護師に少なく、経験年数3年以上10年未満の看護師に多かった（ $X^2(df=2, N=97)=10.693$  Cramer's  $V=.332$   $p<0.05$ ）（表3）。

表3 「検査の必要性」と看護師経験との関連

経験年数	度数	検査の必要性		合計
		必要でない	必要である	
3年未満	度数	9	7	16
	調整済み残差	3.2*	-3.2*	
10年以上	度数	7	38	45
	調整済み残差	-2.0*	2.0*	
10年以上	度数	8	28	36
	調整済み残差	-.4	.4	
合計	度数	24	73	97

\* $p<.05$

『運動』に関する情報のうち、統計的有意差が認められたのは、表4に示す「制限が必要な活動」であり、経験年数3年以上10年未満の看護師に少なく、経験年数10年以上の看護師に多かった（ $X^2(df=2, N=97)=6.547$  Cramer's  $V=.260$   $p<0.05$ ）（表4）。

表4 「制限が必要な運動」と看護師経験との関連

経験年数	度数	制限が必要な運動		合計
		必要でない	必要である	
3年未満	度数	5	11	16
	調整済み残差	0.5	-0.5	
10年以上	度数	16	29	45
	調整済み残差	2.0*	-2.0*	
10年以上	度数	4	32	36
	調整済み残差	-2.5*	2.5*	
合計	度数	25	72	97

\* $p<0.05$

『その他』の項目の情報のうち、統計的有意差が認められたのは、表5に示す「入院から治療までの経過」であり、経験年数3年未満の看護師に少なく、経験年数3年以上10年未満の看護師に多かった（ $X^2(df=2, N=96)=13.181$  Cramer's  $V=.371$   $p<0.01$ ）（表5）。

表5 「入院から治療までの経過」と看護師経験との関連

経験年数	度数	入院から治療までの経過		合計
		必要でない	必要である	
3年未満	度数	7	9	16
	調整済み残差	3.0**	-3.0**	
10年以上	度数	2	42	44
	調整済み残差	-3.1**	3.1**	
10年以上	度数	8	28	36
	調整済み残差	.9	-.9	
合計	度数	17	79	96

\*\* $p<.01$

なお、『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞に関する疾患』、『内服薬』、『退院指導』、『生活習慣』、『食事』、

『不安とストレス』に関する項目において、3群間の統計的有意差は認められなかった。

### 3) 情報提供の時期について

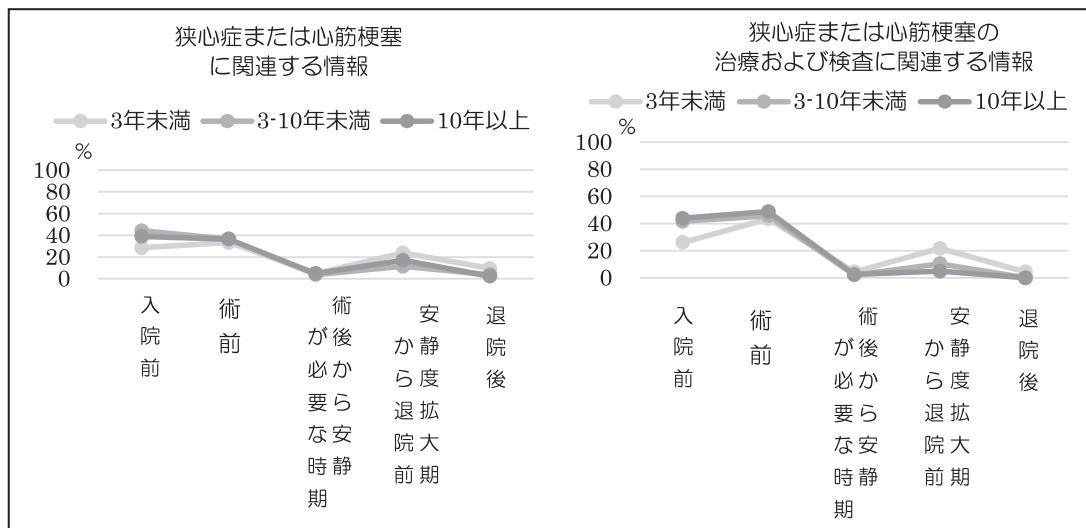


図2 入院前または術前に提供する情報および経験年数群間の比較

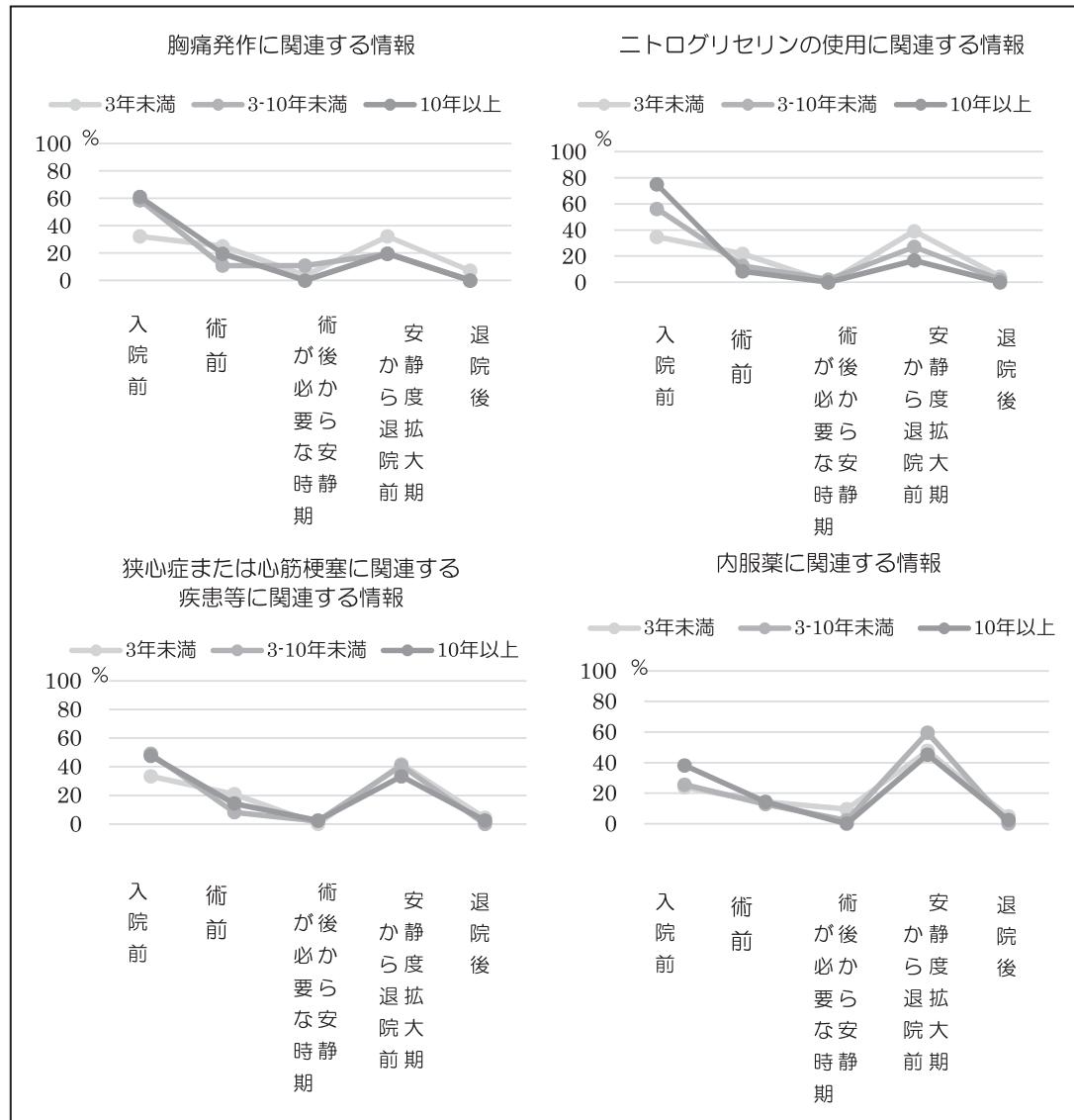


図3 入院前と安静度の拡大期から退院前に提供の必要がある情報と経験年数群間の比較

適切な情報提供の時期について、有意差検定において統計的有意差は認められなかった。

『狭心症または心筋梗塞』、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』の適切な情報提供の時期

としては、3群とも多くの看護師が入院前または術前と回答した(図2)。

そして、『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞に関連する疾患』、

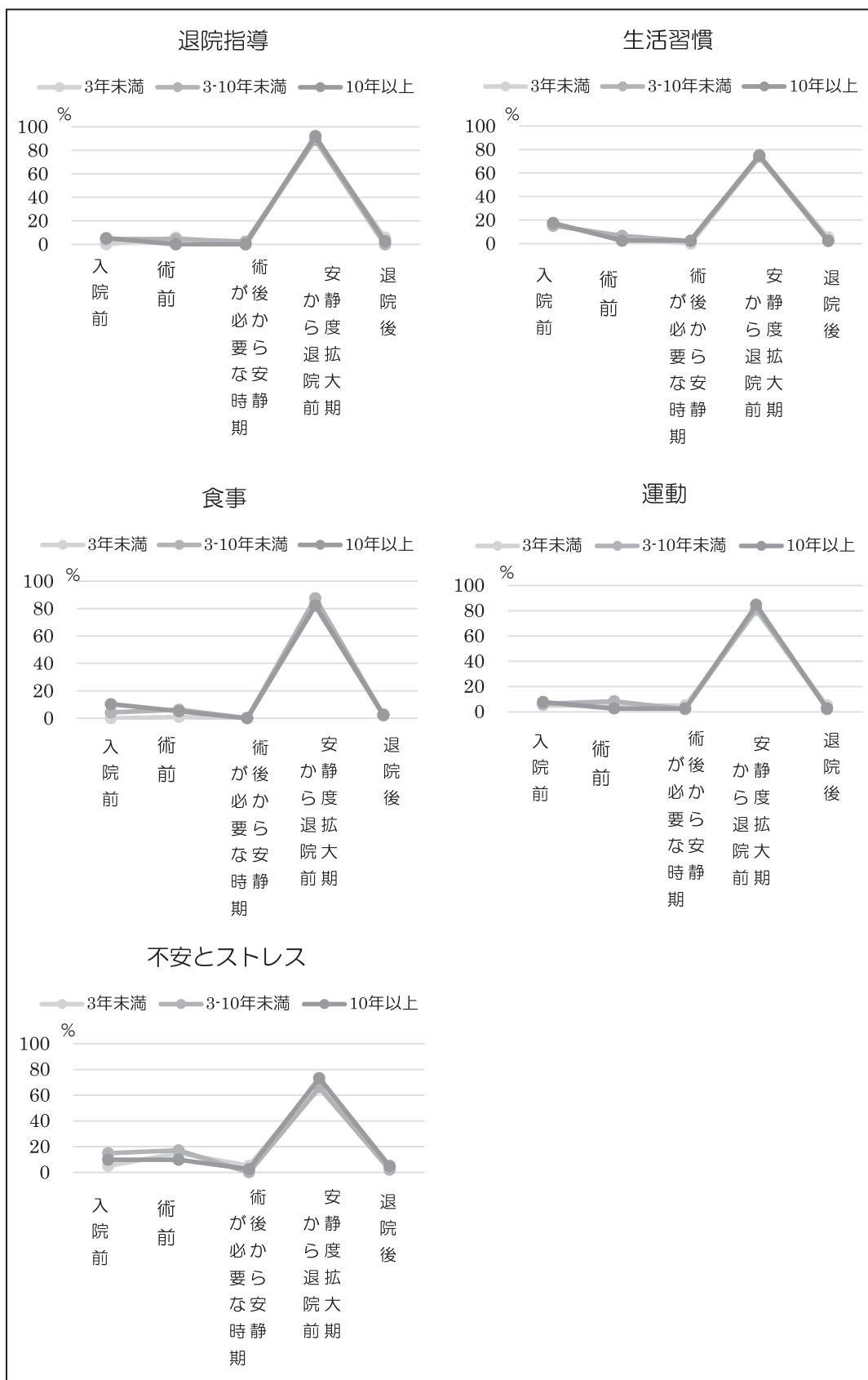


図4 安静度拡大期から退院前に提供の必要がある情報と経験年数群間の比較

『内服薬』に関する情報は、3群とも多くの看護師が入院前と安静度の拡大期から退院前と回答した（図3）。

『退院指導』、『生活習慣』、『食事』、『運動』、『不安とストレス』の情報提供の時期としては、3群とも多くの看護師が安静度の拡大から退院前と回答した（図4）。

#### 4) 提供する必要がある情報の介入方法について

多くの看護師は患者に必要な情報を提供する際、全体的にパンフレットを用いることが効果的であると認識していた。『狭心症または心筋梗塞』に関する情報提供（図5）においては、模型や映像を用いることが効果的と認識していた看護師は、経験年数10年以上の看護師において多く見られた。なお、有意差検定において統計的有意差は認められなかった。

『内服薬』と『食事』に関する情報を提供する方法として、専門とする他職種へ依頼し、情報を提供することが効果的であると認識しており、他職種に依頼すると回答した看護師は経験年数10年以上が多かった（図6）。また、経験年数3年以上の看護師は他職種だけでなく家族の協力を得る

ことが効果的と認識していた。

## VII. 考察

### 1) 提供する必要がある情報について

経験年数により統計的有意差が認められた『狭心症または心筋梗塞』に関する情報である「狭心症または心筋梗塞とは何か」、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』に関する情報である「検査の必要性」と『その他』にある「入院から治療までの経過」について提供の必要があると答えた看護師は経験年数3年未満に少なかった。また、『運動』に関する「制限が必要な活動」については、提供の必要があると答えた看護師は、経験年数3年以上10年未満が有意に少なかった。中村ら（2005）は、経験年数を経ることで、患者の治療や療養の受け入れ状態や治療の必要性の理解を確認し、患者の希望を聞きながら療養上の方法を指導するようになることを明らかにしている。つまり、これらの情報は患者に対する指導の経験を重ねることで看護師自身が必要性を認識し、情報提供を行っていくことが示唆された。

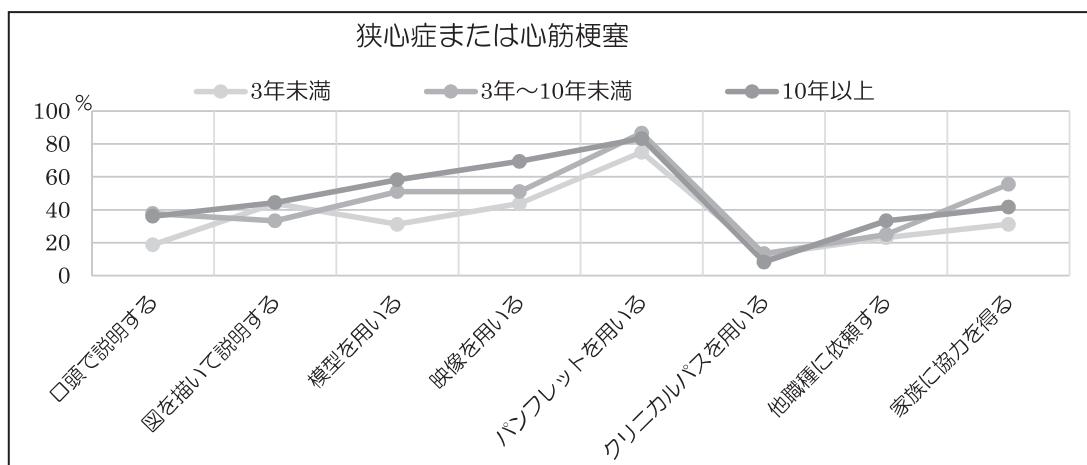


図5 「狭心症または心筋梗塞」についての情報提供のための看護介入

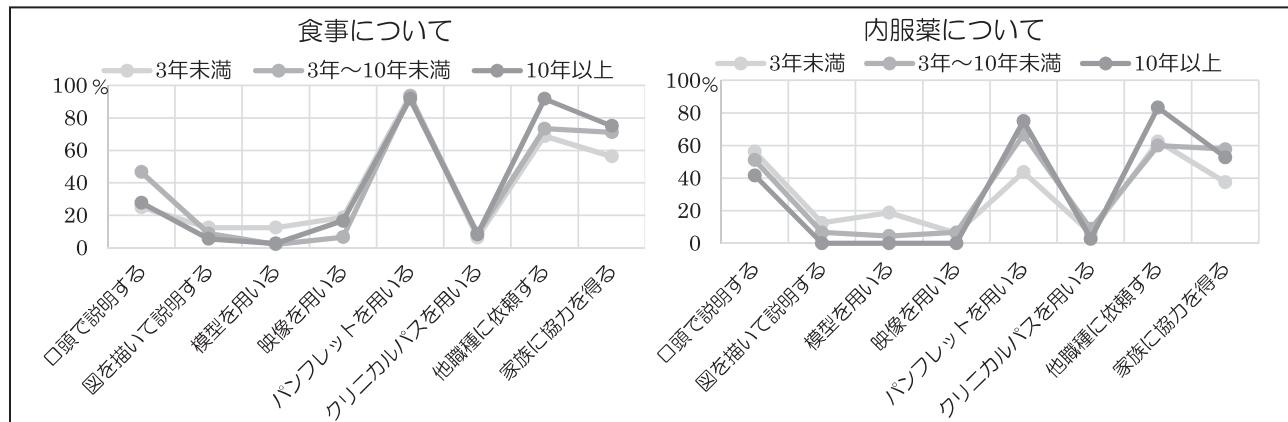


図6 情報提供のための介入方法および経験年数の比較

## 2) 情報提供の時期について

看護師は、入院前または術前と安静度の拡大から退院前を適切な情報提供の時期として捉えていることが明らかとなった。『狭心症または心筋梗塞』、『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』、『狭心症または心筋梗塞に関連する疾患』、『内服薬』に関する情報は、入院前または術前に情報を提供する必要があると多くの看護師が認識していた。これは、術後の回復状態の把握や見通しを立てるうえで必要な情報を術前までの時期に提供し、術後回復の促進に努めている関わりであると考える。町本ら（2011）は、術前には患者が術後回復に対する認識を抱けるよう、術後の経過や症状の変化、日常生活への回復見通しなど、患者の視点に立った情報の提供が必要であると述べている。本研究においても、看護師は手術を受けた患者が回復状況を正しく把握し、術後の見通しを立てることができるように、術前から『狭心症または心筋梗塞』、『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』、『狭心症または心筋梗塞に関連する疾患』、『内服薬』に関する情報を提供する必要があると認識していたと考える。また、『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞に関連する疾患』、そして『内服薬』に関する情報提供は、安静度の拡大から退院前を適切な時期と認識していた。Meadら（2010）は、心疾患患者の困難について調査し、疾患に対する自己管理の難しさとサポート不足について指摘しているが、本研究で看護師が安静度の拡大の時期から退院前に『胸痛発作』、『ニトログリセリンの使用』、『狭心症または心筋梗塞に関連する疾患』、そして『内服薬』に関する情報を提供することが効果的と回答していた。これは、退院後に患者が疾患をコントロールできるように、自己管理の強化に努める関わりとして重要であると考える。また、『退院指導』、『生活習慣』、『食事』、『運動』、『不安とストレス』の情報提供の時期も同様に、3群とも安静度の拡大から退院前に行うことが効果的とされていた。これらの情報は、患者の回復状態、身体状態、そして個々の生活状況に応じて提供する必要があるため、患者の把握が十分に行えた安静度の拡大から退院前の時期に情報提供を行うことが効果的であると考える。

## 3) 提供する必要がある情報の介入方法について

看護師は患者に必要な情報を提供する際、全体的にパンフレットを用いることが効果的であると

認識していた。視覚教材であるパンフレットは、多くの患者に共通した情報を提供する際や一度聞くだけでは理解が難しい情報を提供する際に有効である。情報提供を受けた後、何度も見直しや確認が行えるため、パンフレットは自身の回復状況の理解促進につながる効果的な介入ツールであると考える。『内服薬』や『食事』についての情報を提供する際、専門とする他職種へ依頼することが効果的と回答した看護師が多く見られた。特に、経験年数10年以上の看護師が他職種に依頼した方が効果的と認識しており、経験を重ねることで薬剤師や栄養士との連携や協働に対する意識が向上し、専門とする他職種を活用しながら効果的に情報提供を行うようになるのではないかと考える。また、『狭心症または心筋梗塞』、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』、『内服薬』、『退院指導』や『食事』について情報を提供する際は、家族の協力を得ることも効果的であると多くの看護師が認識していた。特に、『退院指導』や『食事』については、経験年数10年以上の看護師、『狭心症または心筋梗塞』、『狭心症または心筋梗塞の治療および検査』、『内服薬』については、経験年数3年以上の看護師が家族の協力を得ることが効果的と認識していた。そして、『狭心症または心筋梗塞』について情報提供を行う際には、模型や映像を用いることが効果的と認識していた看護師は、経験年数10年以上の看護師に多く見られた。中村ら（2005）は、経験によって指導の知識、技術、態度ともに質的・量的に幅を広げていくことを示唆しており、本研究で得られた結果を支持するものであると考える。

## VII. おわりに

本研究では、多くの看護師は、術後回復状況の理解や見通しを立てるために必要な情報は術前までに、疾患の自己管理や退院後の生活に必要な情報は安静度拡大から退院前までに、治療や検査の結果、そして心機能の回復状況など日々変化が伴う情報については、入院前から退院後まで継続して提供することが効果的であると認識していることが明らかとなった。したがって、CABG患者の看護に携わる看護師は、CABG患者の身体、心理、社会的状況に沿った時期において、個々の患者に必要な情報を提供することが重要であると考える。また、経験年数を重ねることで、他職種との連携・協働に加えて、家族への協力、模型や映像の活用という多角的なアプローチを展開するよ

うになることが示唆された。したがって、経験年数の少ない看護師が効果的にCABG患者へ情報提供ができるよう、提供する必要がある情報の統一化に加え、他職種との連携や協働の必要性、および家族、模型や映像を活用した情報提供が行えるような教育的アプローチが必要であると考える。

#### 謝辞

本研究にご協力いただきました看護管理者、対象者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号：22390426）の助成を受けて行った研究の一部であり、第24回日本医学看護学会学術集会にて発表した。

#### 参考文献

- Fredericks S. (2009): The Relationship Between CABG Patients Characteristics and Perceived Learning Needs: A Secondary Analysis. *Canadian Journal of Cardiovascular Nursing*, 19(1), 13-19.
- Grady, L., & Buckley, J. (1988): Patients preoperation of cardiovascular surgical patients education. *HEART & LUNG*, 17(4), 349-355.
- Hathway, D. (1986): Effect of preoperative instruction on outcomes: a meta-analysis. *Nursing Research*, 35 (5), 269-275.
- 石田宜子、稻垣美紀、高見沢恵美子、他 (2013) : 冠状動脈バイパス術後患者が必要と考える情報と情報獲得に関わる看護援助. 大阪府立大学看護学部紀要, 19 (1), 73-80.
- Jickling, J. L., & Graydon, J. E. (1997): The information needs at time of hospital discharge of male and female patients who have undergone coronary artery bypass grafting: A pilot study. *Heart & Lung*, 26(5), 350-257.
- 梶谷麻由子、内田宏美、津本優子 (2012) : 中堅看護師のセルフマネジメントとその関連要因. *日本看護研究学会雑誌*, 35(5), 67-74.
- 加茂美由紀、長谷部美千代、小野田伸子、他 (2008) : 急性心筋梗塞患者の新生活指導プログラムの効果—指導前後の理解度を比較して—. *日本看護学会論文集成人看護 I*, 38, 96-98.
- 川嶋元子、飯降聖子 (2014) : 訪問看護経験年数が及ぼすリハビリテーション看護実施内容への影響. *聖泉看護学研究*, 3, 27-37.
- Lepczyk, M., Raleigh, E., & Rowley, C. (1990): Timing of preoperative patient teaching. *Journal of Advanced Nursing*, 15, 300-306.
- 町本実保、佐藤まゆみ、佐藤禮子 (2011) : 冠動脈バイパス術を受ける患者の回復に対する認識と術後回復との関連. *三重看護学誌*, 13, 103-116.
- Mead, H., Andres, E., Ramos, C., et al. (2010): Barriers to effective self-management in cardiac patients: The patient's experience. *Patient Education and Counseling*, 79, 69-76.
- 中村悦子、金子史代、清水みどり、他 (2005) : 看護師の患者指導の機能に関する研究. *新潟青陵大学紀要*, 5, 359-372.
- 太田垣美保、山下美緒、染谷淑子、他 (2004) : 看護師の資格・ストーマケア経験年数別の人工肛門増設患者の性指導. *日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌*, 8(2), 36-42.
- 小山田恭子 (2009) : 我が国の中堅看護師の特性と能力開発手法に関する文献検討. *日看管会誌*, 13(2), 73-80.
- パトリシア ベナー (2005) : ベナー看護論 新訳版 初心者から達人へ. 医学書院、東京.
- Rice, H., Mullin, M. E., & Jarose, P. (1992): Preadmission self-instruction effect on post-admission and postoperative indicators in CABG patients: Partial replications and extension. *Research and Health*, 15, 253-259.
- Simkow, A. (1995): A comparison of adult patient and registered nurse perceptions of the educational needs of the patient. UMI microform1375279, A Bell & Howell Co. Michigan.